

横光利一『紋章』

——「近代日本」と「ポスト近代」の「並立」——

松村 良

1

長編小説『紋章』(昭9・11・9月「改造」連載)は、雨の中を走る自動車に乗った発明家の雁金八郎と作家の(私)が、杉生家に向かう場面から始まっている。その時の雁金の様子は次のように書かれている。

目的の家に近づくにしたがつて雁金は不動の姿勢をとり始めた。今夜雁金が失敗すれば、彼の好機は後二年の間は先づ来ないと見なければならぬ。彼の横にゐる運転手の戸山は雁金の目的を早や知つてゐると見えて、ときどき雁金の方に傾きかかつてはにやにやと笑つてゐた。これは雁金がチヨツキの下の腹部に、彼の精製中のバナナの皮を保温するため、今も巻きつけてゐるのにちがひない証拠である。私は雁金が私の横の広いクシヨンへ坐らなかつた原因が、この車が自身の監理を頼まれてゐる自動車店の車であるから

だといふのではなく、腹部に巻きつけたバナナの皮の醗酵する臭気を私に近かよせないためだと、やうやく今ごろになつて分つて来た。（一）

この「不動の姿勢」をとりながら「腹部に巻きつけたバナナの皮の醗酵する臭気」を漂わせている雁金⁽²⁾は、目的の杉生家の前に停った一台の自動車の中に乗り込む「一人の若い美しい婦人」を見かけて、「不意に何事かに気がついた」かのように彼女の後を追いかけて、走り出した自動車の「踏台に足をかけたまま、窓を激しく叩きつづけて開ける開けろと叫」びつづ姿を消す。〈私〉は運転手に命じて彼の後を追うが、

私たちが門を出たときには、もう彼の乗つてゐる自動車は大通りを左へ曲らうとしてゐるときであつたら、私たちがそこまで出かけたときは、他の方から疾走して来る眼まぐるしく濡れた幾台ものぐるぐるした自動車に邪魔されて、どれがどれだか明瞭に区別することが出来なかつた。そのうへに、雲霧のやうに降りかかつてゐる秋雨の煙が、ぱつとライトに輝き渡る度毎に、前後は朦朧として一層見えなくなつて来るのである。それでも私の運転手は雁金の配下であるだけに、スピードを増して見る見るうちに数台を追ひ抜いた。私は運転手に雁金のゐる自動車の番号を覚えてゐるかと思つてみた。運転手もうろたへてゐたときと見えて、細いところは見えなかつたと云つて海底のやうな暗い大道を無茶苦茶に走りつづけた。（二）

従来の『紋章』論は、たとえば雁金と「日本精神」との結びつけに必然性があるか否かといった問題には注目するが、彼がまず自動車に乗って登場すること、また彼が最初同郷の押坂自動車屋に、「自動車とは全く縁遠い」にもかかわらず「車庫の監督」の名目で居候していることには、全く目を向けていない。だが、〈雁金と自動車〉との取り合わせには、無視できないものが含まれている。

十重田裕一「作家案内——横光利一」⁽³⁾は、横光の「解説に代へて(一)」⁽⁴⁾の中の、

……大正十二年の大震災が私に襲つて来た。そして、私の信じた美に対する信仰は、この不幸のため忽ちにして破壊された。新感覚派と人人の私に名づけた時期がこの時から始つた。眼にする大都会が茫茫とした信ずべからざる焼野原となつて周囲に拡つてゐる中を、自動車といふ速力の変化物が初めて世の中にうろうろとし始め、直ちにラヂオといふ声音の奇形物が顕れ、飛行機といふ鳥類の模型が実用物として空中を飛び始めた。これらはすべて震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物である。焼野原にかかる近代科学の先端が陸続と形となつて顕れた青年期の人間の感覚は、何らかの意味で変らざるを得ない。

という一節を引用した上で、次のような指摘を行っている。

「近代科学の具象物」としてここにあげられている「ラヂオ」は震災後に出現したニューメディアであるが(JOAKが愛宕山に開局したのは一九二五年三月)、「自動車」「飛行機」は必ずしも震災後に「初めて」現れた物象ではない。そうではないが、こうした印象を横光が持つに至つた状況が、震災後の東京にはあつたのだ。また、この他にも「感覚」の変容をもたらし「近代科学の具象物」はあるのだ。ここで問題なのは、横光の記憶が正確であるかどうかを確認することにあるのではなく、大震災によつてそれまでの市街が瓦解し、新しい都市が形成されていったということであり、そこに出現してくる、あるいはそれを契機に発展した「近代科学の具象物」が、その時代を生きる人々の「感覚」を変容させたということだ。

大正十二年(一九二三)の関東大震災は、それまで東京市民の足だった市電を壊滅させ、「田太郎」「田タク」といった市営バスやタクシ一の登場を促した。大正十二年に一万四七三七両だった日本の自動車保有台数は、翌十

三年には二万五八七両となり、昭和三年には六万五三三両と増加の一途をたどる。⁽⁵⁾「他の方から疾走して来る眼まぐるしく濡れた幾台ものぐるぐるした自動車」の群れは、まさにそのような震災後の東京を「変容」させた「近代科学の具象物」だった。発明家雁金八郎は、この「近代科学の具象物」の只中から登場する。

震災から復興した東京の、その象徴である「自動車」に乗って登場した彼は、結末近くでは「ラヂオ」の放送にまで出演する。隠元醬油・バナナ酒・魚醬油・酵素利用乾物製造法・松葉酒といった彼の発明品まで含めるなら、「近代科学」は彼の周囲に満ちあふれている。そのような「近代科学」の申し子と言ってもいい雁金は、不思議なことに、そのことを誰も指摘することなく、むしろ「近代」から隔離されるように論じられて来ている。これはいったいなぜなのだろうか。

2

『紋章』における雁金の造型に対して、これまで多くの論者がその「ただの典型的な好人物、そして行動型の人間という、きまり切った枠の中におさめても、一向にさし支えないほどの描かれ方しかされていない」⁽⁶⁾ことと、「日本精神の権化として設定されている」⁽⁷⁾こととの乖離を指摘している。「東京近郊の県下にあつては、その郡第一の資産家であり、代代勤王をもつて知られてゐる名門」の生まれである雁金は、「祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光のために、行動も自然に独自の姿となつて来る」のであり、そのため「彼の行為には、国家といふ觀念が大海のやうに押し迫つてゐた」「彼の行為の上では、およそ何事によらず、ただ自身が正

しいと直覚したことのみに幕進するといふ勇壮果敢な表現をとつて少しも怪しまなかつたところに影響した」と、語り手の「私」は説明した上で、次のように述べる。

もし日本精神といふものの実物があるものなら、私の知つてゐるかぎりには、先づ雁金の相貌と行為とを考へずしては容易に考へ得られることだとは思へない。他の人人の顔には、西欧から流れて来てゐる智識の副産物であるところの、疑ひの片影が、どこかに必ずつきまとつてゐるのを私たちは感じる。この意味では、今ほどヨーロッパ精神が日本精神を軽蔑してゐる時代はないであらう。——雁金のその後の悪戦苦闘も、根元はことごとくこの世人の軽蔑から始つてゐるといつても良かつた。(一)

このような「私」の言説に対して、たとえば江後寛士「『紋章』論」⁽⁸⁾では、「これは、雁金の偶然性の強い、突飛な行為に必然性をもたせるための、いささか無理な理由づけのように思われる」とし、「ヨーロッパ精神」の「日本精神」への「軽蔑」を、「西欧的合理主義」の「日本古来の精神主義」への「圧倒」と言い換えた上で、「後半部の、雁金の悪戦苦闘が、すべてこの対立に起因しているとすると設定は強引すぎるし、それは、物語の全体に十分浸透しているとは言えない。要するに、雁金の相貌と行為を『日本精神といふものの実物』とする性急な結びつけは、決して必然性のあるものとは言えないのである」と否定的な見解を示している。また鳥居邦朗「横光利一『紋章』——山下久内の自意識」⁽⁹⁾でも、「雁金の『日本精神』が、『近代の智識人』である久内の苦悩を救うものとしても、あるいは『近代の智識人』久内を徹底的に敗北させるものとしても書かれていない」「その『日本精神』の内実さえ描かれてはいない」「ただ自意識家久内を裏返した形での行動家として描かれており、極言すれば、自意識過剰に悩む『近代の智識人』久内を照らし出す合せ鏡の役割しかしていない」と、その「日本精

神なるものの内実」が空疎であることを指摘している。田口律男「横光利一『紋章』論——『純粹小説論』を光源として」⁽¹⁰⁾においても、雁金は「ヨーロッパ精神」の洗礼を受けていないという意味での純粹な「日本精神」の保持者」であり「近代的な自我の認識とは無縁のところできている人物のようである」が、「その『日本精神』なる觀念は、充分内化されたものとは言い難い」「必然性のなさと実体の曖昧さ」を露呈しているものであり、「内面に芽生えてきたはずのイメージに、敢えて『日本精神』なる空漠とした觀念を冠せねばならなかった横光の性急さ」を指摘している。

以上の諸説をまとめるならば、「ヨーロッパ精神」||「西欧的合理主義」||「近代の智識人」山下久内と鋭く対立する存在として、「日本精神」||「日本古来の精神主義」||「典型的な好人物・行動型の人間・突飛な行為・近代的な自我の認識とは無縁のところできている人物」雁金八郎は造型されているが、その根幹の「日本精神」が空疎であることから、彼の行動を「日本精神」によつて説明することができず、逆に「日本精神」なる觀念を、テクスト内における雁金の行為によつて規定することもできない。久内と雁金という「ふたりの対照的な成り行きに、近代の合理的な人間認識と『日本精神』というものとの相剋を見る」と⁽¹¹⁾といった見方が必然性も説得力も持たない所以であるが、にもかかわらずこの対立の図式を採用せざるを得なかったところに、これまでの『紋章』論の困難があつたように思われる。わたしはこの対立の図式は根本的に成り立たないものだと考えているが、自説を述べる前に、もうひとつ近年の論を見ておきたい。

芹澤光興「敵」からの「教へ」——横光利一『紋章』私見⁽¹²⁾では、「《行動》の久内と自意識ゆえの《無為》に落ちた久内、という対照性、そしてその雁金の《勇猛果敢》な行動が久内に《作用》し、彼を徐々に動かして

いくという図式——これが「紋章」の、恐らく総ての読者が読みとる基本構造である」と規定した上で、「『日本精神』およびそれに類する言説と、この行為／無為の対立図式が、うまくリンクさせられない」ことを指摘し、「両者に一定の連関をつけようとするなら、雁金における『名門』の意味や『日本精神』の実質をもう一度問い直す必要があるだろう。そのためにも、それらの具体的現れである雁金の『行為』について、再び検証されねばならない」として、幾つかの例証を挙げた上で次のように述べる。

明らかのように、雁金における行為＝発明への邁進は、それ自体が目的ではない。発明はあくまで『国益』＝国家という共同体を利用するための手段なのである。雁金が自らの行為に『疑ひの片影』を抱かずに済むのも、それが自足的もしくは自閉的なものではなく、自己の属する共同体にとって確実に有効であると信じていたからなのだ。だから雁金を『私』が『日本精神』の体現者というとき、それは雁金が自らの行為の意味を保障する日本という共同体との強い一体感を保持し、共同体のために自己を邁進させる滅私奉公的な精神の所有者だったことを表している。そして『西欧近代』なる社会が『私』を生かす『自己本位』を、その出発とゴールに据えて成り立っていたことは、大方が認めざるを得ないはずだ。『今ほどヨーロッパ精神が日本精神を軽蔑してゐる時代はないであらう』(一)——多くの評者を悩ませた雁金をめぐるこの種の言説は、彼の『日本精神』を、己れを空しくして集団に尽す、反『近代』的な観念とすることで、初めて作品内でのポジションを確保できるのである。

なぜ、雁金が「反『近代』的」と呼ばれねばならないか、そこにわたしの疑問は集中する。芹澤論文によれば、それは「日本という共同体との強い一体感を保持し、共同体のために自己を邁進させる滅私奉公的な精神の

所有者」だからであるが、「日本という共同体」あるいは「国益」国家という共同体」といった観念は、明らかに「近代」の産物である。「己れを空しくして集団に尽す」という「滅私奉公的精神」、つまりは国家や企業や共同体に自己のアイデンティティを委ねてしまうのが「反《近代》的」であるならば、明治国家の誕生から第二次世界大戦の敗北、そして戦後の高度経済成長期まで、いたるところに「反《近代》的」なるものが見出されることになる。だとすればそれが「近代日本」にほかならない。雁金はその「滅私奉公的」な側面も含めて、まぎれもなく「近代日本」人である。

小島信夫は「紋章」の雁金に対して、「苦闘の物語、立身出世の物語」という言い方をしているが、これは興味深い発言である。というのも、雁金は少なくともその生涯の最初の時点においては、素朴に「立身出世」⁽¹⁴⁾を夢見る青年だったからである。

欧州の大戦が終ると間もなくわが国の物価は未曾有の奔騰を来たことは、今は誰でも知つてゐることであらうと思ふ。このころには、それらの物価の奔騰するさまは夢のやうなものであつたから、世の人人は一攫千金の夢につかれ、誰も彼もきよときよとして何事をしてよいものか全く仕事に手のつかない時代であつたが、購買係りをしてゐた青年雁金の満ちたる野望も、ひとしくこのとき爪を現してかかるべき驀にひつかからざるを得なかつた。(中略)雁金はしばらくの間は、どちらを向いて良いのか見当さへつかなくなつた。ただ彼はよち登つてひと儲けすべき好機の当来してゐることだけは感じることが出来たが、時勢の特殊性を見極めるためには、あまりに彼は若すぎて無我夢中でありすぎた。

前出の江後論文では「のちには、魚の干物の特許を民衆に解放するという、無欲で、純粹なところを見せるよ

うになるけれども、最初の動機は、決してきれいなことではなかったのである」と指摘されているが、「郷里にゐる間は生活に不自由することは何もなかつた」雁金が、「一攫千金の夢」にとりつかれるのは、「代代勤王をもつて知られてゐる名門」の「家産の挽回」という「野望」のためであつた。青年期の「立身出世」の「野望」が「家名再興の希望」と不可分の関係にあり、その結果として「あたたかい共同体の世界を離れて、冷酷な「他人」の世界へと身を投ずる」こと⁽¹⁵⁾になる雁金の姿は、明治初期の没落士族の子弟とアナロジの關係にある。前田愛「明治立身出世主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで」⁽¹⁶⁾には、「適応の失敗は個人の問題である以上に『家』の問題であり、それは対世間的には恥辱として意識されるのである。逆にこの恥の意識こそ立身出世主義の心理的発条としてかれらを絶えず鼓舞しつづけたものなのだ」とあるが、これはそのまま「紋章」の、「絶望の果てには、名門家といふものは私たちの想像を赦さぬほど、祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光のために、行動も自然に独自の姿となつて来るといふことは、私は一つの不思議な現象だと思ふ」の説明となつてゐるだろう。西欧的な個人主義においては「適応の失敗は個人の責任に帰着するはず」だが、「近代日本」では、「家」や「国家」との一体感を保ち続けながら「近代人」たり得ることが可能だつた、というよりそれが「近代日本」人だつたのである。

「雁金の相貌と行爲」が「日本精神といふものの実物」であるという〈私〉の言説は、以上のことから「近代日本」人の典型、もしくはそのカリカチュアとして理解できるのであり、杉生善作の「時代錯誤のドン・キホーテ」という言葉も、けつして「前近代的」あるいは「反近代的」な存在を指しているのではない。かつて「立身出世」をめざし、「紋章の背光」に支えられた不屈の闘志を抱き、近代科学による「発明」が「国益」につながる

ると確信しているその「近代日本」人としての姿が、善作や久内、あるいは当時の読者にとつても十分に「時代錯誤」的であったのだ。だが現在のわれわれが、戦後の高度経済成長期の「現代日本」人の姿を「時代錯誤」的にとらえつつも、現在との連続性を認めざるを得ないように、「近代の智識人」山下久内にとつて「近代日本」人雁金八郎は、必ずしも従来の通説のように「対照的」あるいは「対立的」存在であるとは言えないのではないだろうか。

3

ここで『紋章』の構成を確認しておくならば、まず(一)(二)で雁金と久内がそれぞれ登場し、〈私〉によって引き合わされることになる。この最初の出会い以降は、「雁金の物語」と「久内の物語」とが、交互に語られていく。すなわち、(三)(四)では主に久内と敦子と初子の関係、さらに山下家の茶会の様子が〈私〉の目を通して語られ、(五)は久内自身の「身辺小説」を〈私〉がライトして読者に公開するという形式をとっている。雁金は(三)と(五)の終わりに姿を見せるが、全体的には「久内の物語」と言えよう。この(五)の終わりで〈私〉は「満州旅行」のために登場人物たちのそばから姿を消し、以後(六)(七)(八)(九)は、通常の三人称の形式で、物産研究所における「雁金の物語」が進行する。(十)(十二)では、酵素利用乾物製造法の完成による試食会が行われ、雁金は敦子に手紙を書いて、試食会に久内を招待する。この、いわば「雁金の物語」に久内が参入するかたちで二人は再会し、久内のスピーチは雁金をはじめ会に出席した者たちに感銘を与える。その帰りに、雁金の結婚相

手に、自分の情事の相手である初子を勧めた久内は、「今日の自分の行動の一切は果して自分の本心からしたものであらうかどうか」と思い悩む。(十)の初めの方で、「私はそのころ雁金から一報を得たので行つてみたが」とあるが、この場面において他に〈私〉が小説世界に登場することはない。以後、(十二)(十三)で久内は初子と別れ、敦子と別居し、〈私〉にフランス語を教えるために、『Le Prométhée mal enchainé』(ジイド、邦訳『鎖をはなれたプロメテ』)を講読する。(十三)の途中から再び「雁金の物語」に移り、(十四)(十五)では多多羅謙吉の特許異議申立に対する雁金の「悪戦苦闘」が続く。その間、久内と雁金が手紙を交したり、雁金は敦子と二度ほど会ったりするが、久内本人は登場しない。(十六)(十七)(十八)における「久内の物語」では、別居中の敦子に誘われて久し振りの父の茶会に出た久内が、「一番面倒なこと、とにかく、俺はそ奴をやらう。」と決意し、「再びわが家へ戻つた」後、銀座のビヤホールで善作から「初子さんと結婚しようと思ふ」意志を聞き出し、いわば善作に初子を譲り渡して小説世界から姿を消す。残る(十九)(二十)では、雁金の特許訴訟の顛末とラザオ出演で上京した雁金と〈私〉が再会するエピソードが語られ、結末となる。

すでに明らかなように、「雁金の物語」と「久内の物語」は、小説内において歴然たる断層を示している。(十一)(十二)の久内の参入や、(十四)の久内の手紙を除けば、「雁金の物語」と「久内の物語」の「通路」は敦子の存在だけである。この断層の理由を、「近代日本」の理念に対する久内の差異として考察してみたい。

山下久内は〈私〉の目を通して、「高い部分で今や混乱に混乱を重ねながら、うづくまつてしまつてゐる近代の智識人」「自意識の過剰に悩んでゐる青年」(二)として語られている。この、登場人物たちを主観的に呈示しようとするのは語り手の〈私〉であるが、⁽¹⁹⁾実際には久内は小説世界内において、純然たる観念としての「自意識

の過剰」に悩むというより、もっと具体的な、自己の生活における或る危機に直面している。端的に述べるなら、それは「家族」と「性」の問題である。

「どうかなすつたの、何も仰言らないで。」

初子は笑ひとまると子供のやうに不安な眼をして久内を見詰めた。

「別に何んでもないんですがね、今のやうな僕なもんだから、考へ出すともうきりがなくつて始末がつかないんです。」

「でも、もうそんなこと、お考へにならなきやいいぢやありませんか。」

「それや、さうだ。」と久内は云つて初めてゆるやかな笑顔になつた。

しかし、このとき久内は初子と二年の間、何を自分がしてゐたのであらうとまた考へた。その二年間には、雁金は四つも五つも発明をしてゐるのである。それに自分は、父親の打撃のためにその横波を食つてよろけてゐただけなのだ、心の深まりと云へば、ただ落ち込まうとする初子への危さを喰ひとめてじつと眺めることの出来た忍耐にあつただけだ。しかし、その結果が初子を雁金に押しつけようとする行為となつて今現れ出ようとしてゐるだけではないか。——何たる馬鹿馬鹿しさだらう。これが生か。(十二)

ここで明らかに久内は自己の「生」への「適応の失敗」を感じているのだが、雁金のような「紋章の背光」を持たないにもかかわらず、それは久内「個人の責任に帰着」しないのである。

……久内にとって、敵対者であるはずの雁金も、その対立すべき要因は、直接的には何一つ存在していない点に留意する必要があるらう。

父親の学界における權威が、必然的に久内を民間發明家の雁金と敵対する立場へ導くし、又、妻の敦子が以前雁金と結婚の約束を交わしていたことも、結局は、彼のあずかり知らぬ世界での出来事なのである。秘かに惹かれる初子が過去に雁金との縁談を持ったことについても同様である。

と前出の田口論文が指摘しているように、久内はみずからの行動によつてこの「適応の失敗」を解決することが出来ない。なぜならそれは「彼のあずかり知らぬ出来事」に端を発しているからだ。彼の「混乱」は、それを彼「個人の責任に帰着」させようとしていることによる。それを「へ自意識の過剰」と呼んでもよいが、しかし例えば、父の事業の失敗や妻との不和といった問題を、なんらかの主體的な「行動」によつて「解決」することが出来るだろうか。つまりは、雁金の「意志の強さと実行力」は、決して久内を「家族」と「性」の問題から、救済する力とはなり得ないのだ。

多くの論者がこれまで雁金と久内の「対照的」「対立的」「側面を指摘し続けてきたのは、そのことによつて山下久内の「自意識」の問題を「克服」しようとする論者の「意志」があつたからにはかならない。前出の江後論文によれば「久内と雁金とが、相対的に形象化され、雁金の行動性が久内の知性の中にとりこまれることによつて、理想的な統一の世界への発展が期待できたはずである」と述べられ、田口論文によれば「雁金の内発的行動性に触発され、自らも行為と意識の分裂を克服せんとして、盲目的に行為の極へ突進する、もだえにも似た跳躍」が「本然の自己を確認するために決然と一步を踏み出した能動的行為であり得た」のであり、芹澤論文によれば「紋章」とは、一口でいえば、《自意識》家山下久内が、とりわけ雁金八郎に刺激される形で《自意識》を克服すべく《関係》の回復を目ざす物語、なのである。——これらの論は結論において、芹澤論文の「自己放下」

による「解決」⁽²⁰⁾を除けば、その「克服」の達成には否定的であり、久内の生き方は「結果的には、相對世界での埋没でしかなかった」⁽²¹⁾ということになる。

だが、もともとこの「家族」と「性」に対する「へ自意識」は、「克服」の対象にはなり得るはずもない。(十二)で久内は敦子に、別居が「お前と俺」の「建て直し」のために必要であることを主張し、敦子も「少し何んだか分つたやうだわ。」と納得する。が、この章の最後には次のような場面がある。

間もなく寢台に這入つた敦子は豊かな髪をばさりと解き、丹前の襟もとから逆さに大きな眼で久内を見上げた。すると、彼は自分の傍で今まで絶えず一緒に生活してゐたのはこの女人であつたのかと、今さらのやうに何か恐ろしい生物を初めて眺める思ひで、敦子のぎろぎろした逆さまの眼をしばらく悚然と眺め入つた。このようなへ他者としての「女人」という「家族」と「性」の實在は、「行動性」による「克服」など不可能である。その意味で、久内の別居はその「行動」以前から破綻してゐるのであり、二度目の茶会の後の「父と敦子とをうち捨てて一人自分の動揺を整へようと努力してゐた昨日までの行ひは、何の効果のあるものではなかつた」(十七)という感慨は、その言葉どおりに受け取らねばならない。だがそれは「克服」への絶望感ではない。「俺は今まで、責任を回避しようとするだけではないか。」「一番面倒なこと、とにかく、俺はそ奴をやらう。」という「新たな心の動き」(十七)である。この小説世界における茶会が「ここに何事か錯乱を防ぐ精神生活者の高い秘密があると久内は直覚」(四)していたと、一度目の茶会で「へ私」が語っていることからみて、この「新たな心の動き」は以前から予定されていたものではあるが、なにはともあれ久内は「悪行のために傷つき倒れた父を負ひ、どちらを向いて良いのか分らぬ敦子を負つて、歩くだけは歩いてみよう」と決心する(十七)

のである。

再びわが家に戻つた久内の生活は別にとり立てて前とは變つたところはなかつた。しかし、それでも、久内には日日に起る漣のやうな家庭内の起伏が前より一層胸の中を素通りしていくやうに感じられた。父を見ても予期してゐたやうな対立的な重苦しさを感じないのも、海中深く没してしまつた自分の身の、動きのとれぬ落ちつきでもあらうかと思われた。彼は自分の傍で生活をしてゐる教子が、早や自分から希望を失つてゐるにもかかはらず、まだまめまめしく主婦のつとめをしてゐるのを見ると、ふと世には不思議な平凡さが根強く呼吸をしてゐるものだと、教子の顔をいつまでも眺めてゐることがあつた。(十八)

このやうな久内の態度を「相對世界での埋没」とみなす論者がいることについてはすでに述べた。だが久内は「海中深く没してしまつた自分の身」を特に嘆くこともなく、「生命保険の月報係」として人並みに「月給日」の喜びを感じては、「ああ、俺もやつこのことで人間らしくなつて来たぞ」と思う。その久内が善作に対して、「自由といふのは自分の感情と思想とを独立させて冷然と眺めることの出来る闊達自在な精神なんだ。」「僕は雁金君に負かされ詰めだけでも、結果としてはたうとう僕の方が勝つたのだ。ところが、こいつは誰にも通じやしない。もつとも、僕は通じなくなつて悲しんでやしないがね。」と言ひ放つのは、「自意識」を「克服」しようとする「意志」を持つ者からみれば、「空疎」な感じがするであらう。前出の田口論文ではさらに、「へ新しい道徳」としての「日本精神」が、ここでは、全く顔を見せていない」という「興味深い矛盾が生じている」ことを指摘している。だが、雁金の「国益」国家という共同体を利するための手段」としての「發明」とは、およそ違つた価値観がここにはある。それは「近代日本」的なものに対する、「ポスト近代」的な価値観だと言つて

よ。

「奇妙な人は奇妙な人だが、しかし、君も知つての通り、あの人は自分の先祖が飢饉のときに、蔵米を全部地方の貧民に分けてやつてしまつて貧乏したり、いろいろな正義のために戦つて切腹したり、さういふ先祖の美談と競争しようとして、絶えず発明をしては特許を民衆に解放しようと思つてゐる人だ。僕は雁金君の思つてゐる正義に対する観念は、譬へどんなものであらうと、まアそれは良いとして、」

(中略)

「勿論、問題ぢやないよ。僕には雁金君が発明するからどうかうといふんぢやないのだ。あの人は何をしよう、そんなことは、ただ僕一人にとつちや初めつからどうだつて良いので、あの人が僕にとつて有難いのは、僕の精神や想像力を誰よりも美しくしてくれるからなんだ。つまりあの人は、僕の意識や情熱といふやうなものを、さきも云つた物や思想を所有するといふやうな浪漫的な感傷主義から、全く自由にひき離してくれるのに大変便利な人だつたのだ。僕の愛情とか正義とかいふやうな高尚なものは、これから始るのだ。僕はまだまだこれからがいよいよ僕なんだ。君なんかは、まだまだ君といふ人間ぢやないのだぞ。」(十八)

これらの久内の言葉は、「近代日本」を正当化するためのイデオロギー(「正義」)からも、「近代日本」の発展に奉仕する科学文明(「発明」)からも、距離をおく立場の表明である。雁金は「家族」と「性」の問題から切り離されていることで、「近代日本」人の典型としてその理念を追求し続ける。久内はその「近代日本」の只中で、その「行動性」においてはけつして「克服」することのできない、個人的な体験としての「家族」と「性」を選び取ることで、一般性・普遍性としての「物や思想を所有するといふやうな浪漫的な感傷主義」(物質文明

が人類を豊かにする）を廃して、自由という「闊達自在な精神」を獲得しようとするのだ。小説世界においてそのことは、なにはともあれ「初子に落ちかかつたのを食ひとめ」（十八）「悪行のために傷つき倒れた父を負ひ、どちらを向いて良いのか分らぬ敦子を負って、歩くだけは歩いてみよう」と決心することの方が、雁金が「四つも五つも発明」することよりも勝るのだと、久内は語っているのである。「家族」と「性」の問題は、「誰にも通じやしない」――一般化を拒否する問題であり、そうであるからこそ普遍的であるという逆説を持つ。

（十八）での久内の言葉から、以上の結論が導かれるが、小説はここで終わるのではなく、雁金の「羅漢のやうな無邪気な顔」（二十）で幕を閉じる。「ああ、あの雁金といふ男は、ドン・キホーテだ。俺はあの男のサンチョ・パンザだ。」（十八）と久内は言っているが、「ポスト近代」は「近代」なくしてはありえず、対立者というよりその従者――つねに遅れてやってくる。『紋章』は、この二つの価値観が、「対立」ではなく「並立」する小説であると見えよう。

注

（一） 単行本は連載終了直後の昭9・9月、改造社より刊行されている。本文の引用は『定本横光利一全集』（河出書房新社版）に拠り、漢字を新字体に改めた。括弧内の漢数字は本文中の章を示している。

（二） このような尋常ではない雁金の様子は小説世界において頻出しているが、それは彼の特殊性及び滑稽さを表わすと同時に、杉生家に売り込む「バナナ酒」の製法の説明の必要上という、一種の合理的判断に基づいてもいる。それは運転手の

戸山の話の中の「雁金が新しいバナナを沢山買って来ては食わずに裏の川へみな捨ててしまふ」(二)というエピソードからも明らかであるが、このような合理的判断の現われとしての彼の「行動」が、その特殊性及び滑稽さの呈示に転化することも、容易に確認できるだろう。

- (3) 「愛の挨拶・馬車・純粹小説論」(講談社文芸文庫、平5・5月)
- (4) 「三代名作全集——横光利一集」(河出書房、昭16・10月)
- (5) 「昭和二万日の全記録・第1巻昭和への期待」(講談社、平1・6月)56～59ページ「円太郎」と「円タク」の時代——昭和初期のモータリゼーション」の記述に拠る。
- (6) 小田桐弘子「横光利一——比較文学的研究」(南窓社、昭55・5月)
- (7) 注(9)に同じ。
- (8) 「国文学攷」(昭43・10月)
- (9) 「国語と国文学」(昭61・3月)
- (10) 「山口国文」(昭58・3月)
- (11) 注(3)表紙カバーの内容紹介文の一節。なお、あえて補足するなら、山下久内の言動に一般的な意味での「近代の合理的な人間認識」を見出すことはできない。
- (12) 「昭和文学論考」(八木書店、平2・4月)所収。
- (13) 「紋章」(講談社文芸文庫、平4・7月)の解説「秘めたる二つの狂気——雁金と久内」に拠る。
- (14) 勿論この「立身出世」はかつての「明治青年の支配的情熱」に支えられた「学問による」ものではなく、資本主義の発達による経済的な欲望へと変質しているが、本論ではそれらがいずれも「家名再興の希望」と結びついている点を重視する。注(16)前田論文参照。
- (15) 注(16)に同じ。
- (16) 「近代読者の成立」(有精堂、昭48・11月)所収。
- (17) 野口武彦「押しつけられる自意識——横光利一「紋章」」(「日本語学」昭61・4～5月)では、「この「ライト」の結果「私」と久内の文体のちがいは根本的に抹消されてしまった。というより、当初からそんな差異は存在していなかった

のである」として、久内への「語り手の『私』の介在はしだいに無用になってゆく」ことを指摘している。注(19)参照。
(18) この『鎖をはなれたプロメテ』の小説世界における引用・解説に対しても、さまざまな論議が行われているが、本論で扱っている問題からは外れることになるのでここでは言及しない。

(19) この語り手の〈私〉の問題は、横光の「純粹小説論」(『改造』昭10・4)の「四人称」の問題と密接な関係を持つのであるが、今回はそのことに触れる余裕がなかった。「純粹小説論」の中で「自分の純粹小説論」あるいは「長篇制作に関するノート」と呼ばれている部分が、他のどの小説よりも「紋章」をふまえて書かれていることは明白であり、この問題に関しては今後も引き続き考えていくことにしたい。

(20) 「自分を捨てて『関係』体としての集団に自らを邁進させる」つまり〈他者〉の存在しない雁金が、「他者との〈関係〉を必須とする自己放下」なるものを久内に〈教へ〉たのだとする芹澤論文の解釈は、わたしには納得できない。

(21) 注(8)に同じ。

(日本語日本文学科 助手)